

【暗証聖句】「相談した。「おい、向こうから例の夢見るお方がやって来る。」創世記 37 : 19

【日・家族の問題】

創世記 37 章 1 節に、「ヤコブは、父がかつて滞在していたカナン地方に住んでいた」と書かれてあるように、やっとヤコブは約束の地で、落ち着いた生活を送り始めることができました。ところが、それもつかの間、今度は家族内の問題が起こるのです。この発端は、ヤコブがヨセフばかりをかわいがったことで、それがために他の兄弟たちはそれが面白くなく、ヨセフをしだいに憎むようになっていくのです。

創世記 37 章 3、4 節「イスラエルは、ヨセフが年寄り子であったので、どの息子よりもかわいがり、彼には裾の長い晴れ着を作ってやった。兄たちは、父がどの兄弟よりもヨセフをかわいがるのを見て、ヨセフを憎み、穏やかに話すこともできなかつた。」

兄弟たちはヨセフと穏やかに話すことができなくなるほど、憎しみや嫉妬心でいっぱいでした。ヤコブはなぜヨセフをどの息子よりもかわいがったのでしょうか。聖書は「年寄り子であったので」と書かれてあります。下の子が可愛いがられることは、世の中でもよくあるものですが、ヨセフにだけ「裾の長い晴れ着を作ってや」るなど、あからさまにえこひいきするのは、他の兄弟たちによって面白いはずがありません。

また、ヤコブのえこひいきだけでも我慢できないことだったのに、それを知ってか知らずか、ヨセフの甘やかされて育った性格や行動にも問題がありました。たとえば、「兄たちのことを父に告げ口したり」（創世記 37 : 2）、兄たちばかりか父ヤコブまでもヨセフにひれ伏す夢を見た、無邪気に語ったりなど、自ら憎まれるようなことをしてしまうのでした。この夢の話については、さすがにヤコブも叱るのですが、しかし、兄たちとは異なり、「心に留めた」（創世記 37 : 11）と書かれてあります。ヤコブは神様が夢で語られることを経験的に知っていたので、無視することができなかつたのでしょうか。

なお、ガイドの著者は、ヤコブがヨセフを特別扱いしたのは、「ヨセフを長子にまで高めようとするヤコブの隠れた意図の表れ」だったと言っています。そうかもしれません。少なくとも長男のルベンは、ヤコブの妻と関係を持ってしまったことにより、長子の特権を受けることができなくなっていました。

【月・ヨセフ、襲われる】

ヨセフに対する兄弟たちの憎しみにより、取り返しのつかない大事件へと発展していきます。兄たちが羊を飼っているところに、ヨセフが近づいてくるのがわかると、なんと、「ヨセフを殺して、穴の一つに投げ込み、あれの夢がどうなるか、見てやろう」（創世記 37 章 20 節）と言うのです。これは果たして本気でしょうか。それとも悪い冗談のつもりだったのででしょうか。ルベンが、「命まで取るのはよそう」と言っている様子を見ると、冗談という感じではなかつたと思われまふ。4 人の腹違いの兄弟。その中で、ヨセフだけがラケルから生まれており、同じ母を持つ兄弟がこの中にはいなかったことも、影響していたかもしれません。

しかし長男ルベンは、さすがに殺すのは行きすぎたと思い、「穴の中に投げ入れよう」と提案します。あとから助け出そうと考えたようです。また、ユダも殺すのはやり過ぎだと思い、イシュマエル人の行商隊が通りかかっているのを見つけ、ヨセフを売ろうと提案します。そうすれば殺さずにすみ、都合よく家から追い出すことができると考えたのでした。兄弟たちは、この提案を受け入れます。ところがのんびりしているうちに、そこを通りがかったミディアン人の商人たちがヨセフを見つけ、イシュマエル人に売り渡してしまうのです。ルベンが穴のところに戻ってきたときは、もう時すでに遅いでした。エジプトへ売られたヨセフは、ファラオの宮廷の役人で、侍従長であったポティファルのものとなるのでした。ヨセフの人生は想像もしていなかつた方向へと、いやがおうなしに引っ張られていくのですが、この背後には常に神様がおられ、導いておられたのでした。

私たちの人生も、このように一瞬に変わってしまうことがあるかもしれません。そこに色々な人たちが関わっているかもしれません。しかし、どれだけの人たちがかかわっていたとしても、彼らの思い通りになるのではなく、最終的には主が導かれた通りになっていくのです。

【火・ユダとタマル】

創世記 38:1 「そのころ、ユダは兄弟たちと別れて、アドラム人のヒラという人の近くに天幕を張った。」

38 章はヨセフ物語を休止し、4 男ユダのことが記されています。そして、39 章に入ると再びヨセフのその後が書かれます。ヨセフをエジプトに売った後、エジプトでヨセフと再開するまでの 20 年をどのように過ごしたのかについて、ユダの家族のみが記されているわけです。ユダ族には、後にダビデやソロモンなど優れた王を輩出したり、他の部族が聖書から姿を消す中で唯一残されていく部族であったり、そして、何よりもイエス・キリストがこのユダ族から生まれたという点で際立った特徴があります。しかし、ここに記録されているユダの物語は、華々しいものではなく、むしろ罪を負ったユダのその後の物語であり、その罪はなお一層重くなり、家族まで巻き込んでいくのでした。

ユダは家族から離れ、異邦人の地に行き、カナン人の娘を妻とします。妻の名前は記されていません。ヨセフのことで罪の重荷に耐えられず、父の家から逃げだしたのかもしれませんが。父の家を出て異邦人の妻と住む方が、平安な心

で暮らせると思ったのかもしれませんが。しかし、異国での生活は決して幸せとはいいがたいものでした。長男のエルも次男のオナンも、主の意に反したために、あいついで死んでしまうのです。長男の妻であり、長男の死後は習わしとして次男の妻となったタマルが原因で二人の息子が死んでしまったのではないかと考えたユダは、唯一残った三男のシェラも死んでしまうのではないかと恐れ、タマルに三男が成人するまで実家に帰るように促します。しかし、シェラが成人しても結婚させてくれないことに怒ったタマルは、ユダの妻が亡くなった後に、遊女のふりをしてユダを誘惑するのです。何も知らないユダは、息子の妻タマルと姦淫の罪を犯してしまいます。ヨセフに対する罪、それを悔い改めることなく外国へ逃げ、しかし、逃げた先で2人の息子を失い、さらに息子の妻と姦淫の罪を犯してしまう。そこで、ユダは自分の罪を認めたのでした。また、タマルに関しては、神様の恵みにより罪を赦された女性として、マリヤの系図の中に出てくる4人の女性のうちの一人として記録されています。

【水・ヨセフ、エジプトの奴隷になる】

創世記 39:2 主がヨセフと共におられたので、彼はうまく事を運んだ。

侍従長ポティファルの家の奴隷となったヨセフは、すべてのことをうまくこなしていきます。それは「主がヨセフと共におられたので」と書かれてあります。主から見捨てられたかのように思える状況の中で、しかし、主は決して見捨ててはいませんでした。その証拠、しるしとして、すべてがうまく運んでいくのでした。クリスチャンとしての歩みにおいて、うまく行くか行かないかはその人の能力によるのではなく、主が共におられるかどうかで決まることを忘れてはなりません。また、それは周囲の人も認めることとなります。ポティファルが財産の管理を任せるほど、ヨセフは信頼されました。

しかし、このようにうまくいっているような状況の中で、主は試練や誘惑を許されます。ポティファルの妻が誘惑してきたのです。主と共にいるからこそ、サタンは攻撃してくるのです。「彼女は毎日ヨセフに言い寄った」(創世記 39:10)とあるように、誘惑は一度で終わりではありません。しかし、ヨセフは、すべての誘惑に勝利します。すると、それに腹を立てたポティファルの妻によって濡れ衣を着せられたヨセフが投獄されてしまいます。第二の試練です。一難去ってまた一難といったところですが、すべては主のコントロール下にありました。牢屋の中でも「主がヨセフと共におられ、恵みを施し、監守長の目にかなうように導かれたので、監守長は監獄にいる囚人を皆、ヨセフの手にゆだね、獄中の人のすることはすべてヨセフが取りしきるようになります」(創世記 39:21, 22)

【木・ファラオの夢】

エジプト王の給仕役と料理役が主君であるエジプト王に過ちを犯し投獄されます。ある夜、二人とも夢を見、その夢をヨセフが解き明かします。それは、給仕役は3日後に釈放され、料理長は3日後に死刑となることを暗示する夢でした。そして、ヨセフが解き明かした通りになったのでした。夢見る者が、ここでは夢を解き明かす者とされたのは、興味深いところです。ヨセフは給仕役に、無事に釈放されたならば、王に自分がヘブライ人の国から無理やり連れて来られ、無実の罪で投獄されている。牢屋から出してくれるように頼んでほしいとお願いします。一見、良いアイデアのような印象を受けますが、これまで主がすべてを導いてくださったことを考えると、主の力を利用して、自分の考えで、牢屋から出ようとしていることがわかります。それがためか、給仕役はヨセフとの約束をすっかり忘れてしまうのです。ファラオがある夢を見るまで。

2年後、ファラオは2つの夢を見ます。ファラオはエジプト中の魔術師と賢者をすべて呼び集めさせ、自分の見た夢を彼らに話しましたが、ファラオに解き明かすことができる者は誰もいませんでした。このとき給仕役がヨセフのことを思い出すのです。ファラオはヨセフに、「お前は夢を聞いて、それを解き明かすということだが」と言葉をかけると、すかさずヨセフは「私ではありません。神様がファラオの繁栄を知らせてくださるのです」と答えます。私たちは、日々の生活においてこのような証を立てているでしょうか。神様が生きておられることを証する、またとないチャンスがやってきたのです。それと共に、王や高官の周囲には、自分を売り込みたくて虎視眈々としている人たちが多く、ヨセフは自己顕示をせず、神様にのみ栄光を帰そうとしています。ここにヨセフの成長した姿を見ることができます。王の見た夢は、7年の豊作のあと7年の飢饉がやってくると暗示したもので、だから、それに備えなければならぬとヨセフは伝えます。このヨセフの夢の解き明かしを聞いたファラオも家来たちも皆、深く感心します。そして、「このように神の霊が宿っている人はほかにあるだろうか…お前をわが宮廷の責任者とする。わが国民は皆、お前の命に従うであろう。ただ王位にあるということだけで、わたしはお前の上に立つ」と、ファラオはヨセフを国の指導者に大抜擢するのです。まだ、夢の解き明かしが実現もしていないのに、これほど感銘を与えたのは、その背後に神様がおられたからでしょう。神様が働くとき、人知を超えたことが起こるのです。ヨセフの物語はそのことを実によく表しています。